

---

# ゴースト・リンク

柄卯鳥

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ゴースト・リンク

### 【Nコード】

N9374T

### 【作者名】

柄卯鳥

### 【あらすじ】

悪霊を狩る者……除霊士。

若干十六才にしてある土地を任されるほどの実力を持つ少女が会出现、一人の男性と一人の少年。

その二人との出会いと、自らの学校で起きた、悪霊絡みの自殺事件の調査……。

協力という形で、二つの糸が、今交わる。

## プロローグ

女の子が、落ちていく。

一人の女子高生が、逆さになって、堕ちていく。

その光景を、少女のような男の子が、ただ静かに見つめている。

……何もしない。男の子は、静かに見つめるだけ。

だって、何も出来ないから。

コレは男の子にとって、ただの夢の中の出来事で、触れることのできない出来事で、見ていることしかできない出来事だから。

だから、ただ静かに見つめている。

夢らしく、流れに身を任すように、ただ何も言わずに眺めている。手すりに足を乗せ、その向こう側へと勢いを乗せ、身体を落とす、その様を。

学校の吹き抜けの踊り場、その最上階の六階から一階に向け、自ら落ちていく、その姿を。

止めることも出来ず、止めようとすることすら諦めて、独り静かに見続ける。

「……………」

悲しそうに。

苦しそうに。

死を止めることが出来ず、死を傍観していることしか出来ない自分を責めるように。

泣きそうな表情のまま、苦しそうな表情のまま、己の無力を嘆くように。

……夢なのに。

夢であるはずなのに。

それなのに男の子は、会話はもちろん、面識すら無いその女の子が……目を瞑り、頭から堕ちていく光景を、ただ静かに眺め続けている。

何故なら……何故ならその光景が――

グチャツ……！

「っ……！ きゃあああああああああああああああああ  
ああ――……………！」

――現実だと、男の子は知っていたから。

男の子にとっては夢で、夢として見ている光景であつたとしても……この光景が現実で起きている出来事だと、男の子は、分かっていたから。

今、自分が夢として見ているこの光景は……見えないところで、実際に起きている出来事だと。

現在進行形で、起きてしまっている現実だと。

だから、悲しくなる。

だから、苦しくなる。

心が締め付けられる。

吐きそうになる。

「……………」

けれども、我慢する。

我慢するしかない。

それが、自分に課せられた、力と運命なのだから。

自分にしか理解することが出来ない、誰かと共有することなんて叶わない、能力なのだから。

「……………」

もしこれが、本当にただ傍観していることしか出来ないのなら、もう少しだけ……ほんの少しだけ、男の子の心が傷つくことはなかっただろう。

けれどもこの男の子は、幸運ざんねんなことに、夢の中の登場人物としてその世界に干渉出来てしまっていた。

夢から覚めたら周りからは忘れられる、そんな存在自体が臆気な登場人物として、現実世界に触れることが出来てしまっていた。

だからこそ、その“幸運”のせいで、少年の心は酷く傷ついてし

まっている。

結果的にその幸運は、不幸へと成ってしまっている。

記憶に残ることなく世界を変えられるのに、変えることが出来ず人を殺してしまう……そんな自分の無力を、実感してしまうから。

何度も足掻き、幾度も失敗し、諦めきつたのに、投げ出そうとしたのに……その場面に出くわす度に、心の奥底で今度こそ助けられるのではと想ってしまい……前回のように、前々回のようにと、反省しながら行動を起こしたにも関わらず、今回のように、また、静かに見ていることしか出来ない。

そんな、無力な自分のせいで……助けられたかもしれない一人の、心の悲鳴を、聞くことになってしまっている。

「……………」

元々救えなかった命……そう思うことで、そう自分を正当化することで、何とか悲しみを紛らわせようとする。

けれども、紛れない。

そもそも、それで紛れるのなら、こんなにも傷つくことなんて無かった。

こんなにも悲しく、苦しい気持ちになることもなかった。

何度も足掻くことも、幾度も失敗することもなく、早々に諦めて、投げ出せていた。

だけど、ソレはできなかった。

だって……彼が、優しいから。

見知らぬ人なのに、自分が助けることが出来たかもしれない命を、目の前で散らしてしまうことに悲しんでしまうほど、優しいから。

「……………」

そうして……そうして、何度も自分の心を、どこかで無駄と思いながらも紛らわしながら、男の子はいつもの浮遊感を実感していた。夢から覚める間際の、浮遊感を。

「……………」

その、浮遊感に身を任せ……男の子は、その場から消え去った。

己の夢から、覚めるために。

## プロローグ（後書き）

前のもの（見てない人は気にしないで）、じつは昔やってた自分のサイトに上げてたことを知ったので、消した。

代わりに、前回の後に書いたものを掲載。

こっから設定だけを流用して派生した作品が結構あったり…。

まあどれも駄作であることに変わりはないだろうけど。

2011年現在、三年前の作品ながら読み返すと、誤字脱字が多いこと多いこと。

このままだと設定矛盾とかも出てきそうな予感。

さすが元になったものだなあ…とシミジミ。

これから付き合っていくってくれる人がいることを願う。

## 除霊士・木嶋蒼子

少女の名は、木嶋蒼子という。

男子高校生の一般平均身長とほぼ同じ高さ、スラリとした凹凸の少ない体型、鋭い目つき、一本のゴムで無造作に結んだ腰まで届く長い髪、と、中性的な印象を与えてくる雰囲気放っている、そんな少女。

そんな少女が一人、梅雨入り間近のジメジメとした空気の中、保健室から教室へと戻るための廊下を、静かに歩いていた。

「……はあ……」

静かな廊下に響く、女の子のようなため息。前述の見た目に反したその声は、彼女が間違いのない少女であることを表し、同時に、まだまだ子供であることを示してきている。

「……はあ……」

二度目のため息。静まり返った廊下でのその音は、妙に響いて聞こえてきた。

廊下に彼女のため息以外の音が無い理由……それは今が、授業の真っ只中だから。

だからこそ、彼女の気も重くなっている。

授業中の教室に戻らなければいけないという、想像しただけも注目を浴びてしまうことが分かる出来事が、すぐ目の前で控えているから。

そのせいで、自然と足取りも重くなっている。

（全く……少しマシになってきたって聞いた途端、教室に返すなんて……という神経してんだか……）

仮病を使うべきだったかな、なんてニュアンスを含みつつ、心の中で愚痴を漏らす。

別に、授業に戻るのがイヤという訳ではない。

ただ、このタイミングで授業に戻った時、注目を浴びてしまうの

がイヤなだけ。

注目を浴びること自体はどうということもないのだが……授業中の教室のドアを開いた時の、あの独特な好奇心な視線。

ソレが、イヤなだけだ。

けれども、決して授業をサボろうとはしない。考えはするけれど、実行には移さない。

根っこ“だけ”が真面目で、家の手伝いに関する事以外全てに臆病な彼女だから、考えたとしても行動は出来ないのだ。

だから、せめてもの逃げと、自分に言い訳が出来るという臆病な理由から、少しでも注目を浴びる時間を遅らせるかのように、いつもの彼女からは考えられないほど遅い足取りで、今は教室へと向かっている。

もしこれが、授業終わりまであと少しならば、てきとうに人気の無いところをうるちよろして、授業が終わるまで待つていただろう。仕方が無かった、と自分への言い訳を欲する彼女の心も埋められる。だが現実には、授業が始まってすぐ。

これではうるちよろしているところで他の教師に見つかってしまっただろう。そうなつては即説教コース行きだ。

（うゝん……なんとか注目されることなく授業に戻れないものか……あの妙な気まずさがある視線の集中さえどうにかなれば、平然と授業に戻るんだけどなあ……）

なんて思案を続けながら、ゆっくりと歩を進めている。止める度胸も無いから、芋虫よりも遅い速度で、進め続けている。

（もう皆あたしのことなんか幽霊みたいに見えなきゃ良いのに………つてそれだと独り手にドアが開く光景を皆が見ることになるのか……ああでも、あたしにさえ視線が集まってないんならそれでもいいか……。まあ、そんな方法なんて無いんだけど）

思考がズレてきていることにも気付かずそんなことを考えていると……とうとう階段前に辿り着いてしまった。後はこの階段を四階まで上がり、三組の教室へと戻るだけ。スゴロクでいうと、後は六

の目でゴールが出来るような状況だ。とはいっても、彼女は一しか  
出し続けないのだろうが。

（ゆっくり階段を上つてれば良い案が思いつく！……はずもない  
か）

「……………はぁ……………」

再三のため息は目の前の階段にまで響き、自分よりも早く上の階  
へと昇っていった。

「……………」

と、何となく、吹き抜けとなっている玄関ホールへと視線を向け  
る。

校舎の中央付近にある目の前の廊下の、すぐ隣。事務室分の距離  
を開けて広がる、ただっ広いその場所。

もちろん、何も無い。ただ校門をくぐってすぐの、校舎の前にあ  
る自動ドアをくぐってすぐの、外来者受付兼警備室の前に広がる、  
割と大きな目のホールがあるだけ。ここよりもさらに、声を響かせそ  
うな空間が、そこには広がっていた。

（このまま出て行って家に帰る……なんてこと出来る度胸があつた  
ら、授業サボってるか……）

なんて、ちよつとした自虐を頭の中でしていると――

グチャツ……………！

――大きな肉が潰れるような音が、固いスイカが叩き割れるよう  
な音と混じり、静まり返った廊下に、閑散としていた玄関ホールを  
中心に、彼女のため息以上の音で、響き渡った。

「つ……………！」

息を呑む。声が出ない。呼吸が苦しくなる。止まりそうになる。

あまりにも現実離れしている出来事が目の前に起きたせいで息が  
詰まり、突然の呼吸停止に伴って目の前が真っ暗になってくる。

クラクラしてくる。立っているのも辛くなる。頭を鷲づかみにさ  
れて揺さぶられているような気持ち悪さが襲い掛かってくる。膝を  
ついて倒れてしまいそうになる。



たその男性を、見ることは無い。

「……………」

ただ静かに、ただ呆然としながらも、上の階を見つめ続ける。授業を行っていた教師や、廊下へと溢れてきていた生徒達が見ている中、彼女が落ちてきたであろう階を見つめ続ける。小さな女子の悲鳴が響いてくる中、小さな男子の驚愕の声が響いてくる中、ある一点を凝視し続ける。

幽霊のようにスウツと消えた、男の子がいた場所を。

おそらくは、彼女にしか見えていないであろう、男の子が消えた箇所を。

（あれは……）

感じたことがある気配に、眉を顰める。自分の地元から感じたことのあるその気配に、違和感を覚える。

この学校から地下鉄を乗り継ぎ一時間も掛かる、そんな遠い地元の場所から感じていた気配を、ココで感じたことに、妙な胸騒ぎを実感する。

（たまに地域の見回りをする時に感じる気配……どういこと……？）

その考えに答えが出たのは、それからしばらくしてからだった。

除霊士。

簡潔に言ってしまえば、テレビ等でよく観る霊媒師や霊能力者と一緒のようなもの。

だが、大きく違う点が一つある。

それは、幽霊を殺すことに特化されている、と言った点。

霊媒師は、霊と対話をし、成仏させようとする。

霊能力者は、霊を視て、追ひ払おうとする。

そして除霊士は、霊を問答無用で、殺そうとする。

これこそが、それぞれに名称に対しての、大きく違う一点。

もちろん他にも、霊媒師や霊能力者との違いはある。

その代表点として、除霊士のみが、国の正式機関として認められているということ。世間には公表されていない、されることはない、裏の警察組織として、認識されているということ。

その証拠に、除霊士が国営機関として設立されてから、世間での心霊現象は減少の一途を辿っている。

ある一定の期間を境に、心霊写真などが減り始め、心霊番組が悉く無くなっていった……その原因は、除霊士にあったのだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9374t/>

---

ゴースト・リンク

2011年6月10日17時10分発行